

大
西
暢
夫

和ろうそくは、

つなぐ

Alicekan

和ろうそくって、どうやって作られ、なにからできているのだろう。



ここは、愛知県岡崎市の和ろうそく職人・松井さんの工房。



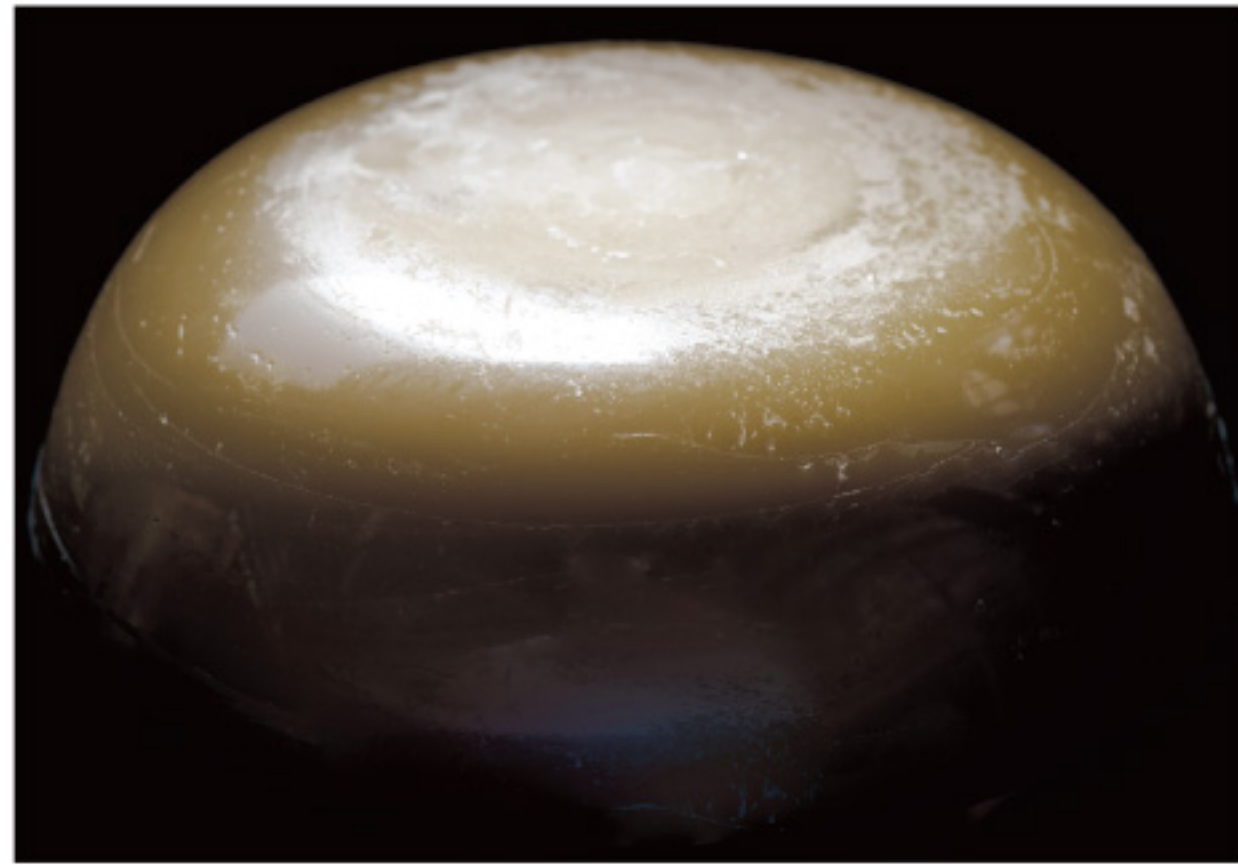
朝一番に火を起こし、溶けてドロドロになった蠟を、手でぬりこんでいる。串に取りつけられた芯に、蠟を手でぬっては乾かし、またぬっては乾かす。そのくり返りで、しだいに太くなっていく。

Alicekan



和紙を筒状にまいて、
それに灯芯というものを
まきつける。
灯芯が外れないように、
上から真綿をからめたも
のが芯になる。
鉛筆のような形のかわい
らしい芯は、和ろうそく
の大きさによって、太さ
や長さを変えている。

妻の文子さんは、
和ろうそくの芯を、
手作りしている。
「ここに嫁に来て、
作りかたを教わったの」



AliceKan

年輪のように見える
和ろうそくの断面は、何度も
ぬっては乾かすことでできる、
手作りのあかしだ。

「蠟って、
なにからできているのか
知っている？」
と、聞かれたが、
ぼくはわからなかった。

「蠟って、ハゼの木の実をしぼったものなんだよ」

木の实から採れたとは思えない、
ふしぎなかたまりには、
べたつとする油っぽさがあった。

人がその材料と出会って、
ろうそくにするまで、
どれだけの知恵をしぼったことだろう。

ぼくはすごく興味をもった。

ハゼの実の収穫が見たくて、長崎県島原市をたずねた。

12月の寒空の下、「ちぎりこさん」とよばれる島田さんが、木の枝に足をかけ、ブドウのようにたわわに実った実を、ひと房ずついていねいにかごに入れている。

まわりには、樹齢100年をこえる大木もある。

「木の上から、海も山も見わたせて、この仕事は、気持ちいいですよ」と、島田さんが笑顔でいう。



島田さんが集めたハゼの実は、近くの蠟職人、本多さんの手にわたった。本多さんは重さを測り、小枝をとりのぞいた実を蒸し始めた。

